

論文

万有的世界と地平的世界—世界の二重性に関する現象学的考察—

Phenomenological consideration about duality of the world
—the universal world and the horizontal world—

加藤 誠之 (生徒指導研究室)

Masayuki Kato

Students Guidance Laboratory, Faculty of Education, Kochi University

Some students who don't attend at school complain, when they first become unable to go to school, of the fears without any clear reason against the world. I, the author, have clarified the essence of those as "Ich-Erlebnis" (ego-experience), which means the separation from the life-world with "néant" (nothingness). However, they will gradually regain ties with the life-world. This indicates that the existence of those students is supported with "something" that is more basic than the life-world. In this article, the life-world will be called "universal world" as the aggregation of things and the "something" will be called "horizontal world" that lies under the "universal world" and implicitly supports it. This duality is reflected in the Heidegger's thought, who referred at the early stage to the world of "Zeug" (tools) and at the later stage to the world of "Geviert" (four elements). Human beings are originally distributed across the dual worlds and have to perform "Weltspiel" (plays of the world) between them. This is vividly shown by the fact that delinquency, which is the "drift" between the law-abiding world and the outlaw-world, can often work as an opportunity for juveniles to recover themselves.

第1章 はじめに—自我体験と世界の二重性—

を起こさせた直接の原因であった。

第1節 思春期に見る自我体験

不登校児童・生徒の中には学校に通えなくなり始めたとき、今まで慣れ親しんでいたはずの学校に対して、急に理由の判然としない恐れを訴える者が見受けられる。例えば、仮にAさんとする男性は18歳の時に発表した手記で、自分の不登校を引き起こした直接の契機として、小学校6年時の体験を以下のとおり語っている¹⁾。

…(前略)ある日の授業中に私は妙な気持ちに襲われた。気持ちがドキドキしてきて、手に脂汗をかき、今にも自分がどうにかなくなってしまうのではないかという不安な気持ちに襲われたのである。じっと椅子に座ってられない感じがして、今にも気がおかしくなってしまうのではないかと思うほどであった。…(中略)…授業中にこうした不安な気持ちに襲われたことが、私に登校拒否

筆者は従来の研究で、不登校児童・生徒のこうした経験を、思春期に生じる世界—内—存在 (In-der-Welt-Sein)²⁾の変容体験として解明してきた。そもそも、小出浩之に従えば、子どもたちはこの世に生を享けた後、「まず自分をいい子に同一化する」³⁾。彼らにとって、この同一化は「この世界に存在する根拠」であり、「人間の生命」すなわち「生きていく力」の根源に他ならない⁴⁾。彼らはこの同一化を基礎として、爾後の人生で様々な不幸に遭遇したときも、自らを「基本的には世界に受入れられた者」と信じて「自分の未来に希望を託しうるのである」⁵⁾。このことは、ハイデッガー (Heidegger, M.)の言葉を借りて言えば、世界と慣れ親しみ (mit der Welt vertraut sein)、世界のもとに住まっている (bei der Welt wohnen) という意味での世界—内—存在 (In-der-Welt-Sein)の実現に他ならない⁶⁾。もちろん、

子どもたちも世界の中で生きている限り、自分を受け入れてくれない迫害的な他者と出会っているはずである。しかし、彼らにとって、こうした他者は肯定的な世界の中でたまたま出会われた偶発的存在であり、当該世界に対する基底的信頼を揺るがすに至らない。すなわち、彼らは肯定的な世界の中にあたかも溶け込んで一体化するかの如き仕方で休らっており、当該世界と自分とを切り離す亀裂を知らないのである。しかし、彼らは思春期を迎えると、こうした仕方で肯定的な世界の中に休らていられなくなる。このことは、先に言及した自我体験に関する考察を通じて直ちに明らかになると考えられる。

自我体験とは、ドイツの青年心理学者ビューラー、Ch.によって「青年期における自我の発見」の「体験的に純粹かつ極限的な現れ」を指す語として用いられた術語である⁷⁾。本節では当該体験の本質を、当該体験に関する範例的記述として有名なルドルフ・フォン・デリウスの以下の記述⁸⁾をもとに考察する。

私は自我意識が個人的にどのように始まったかを語りたい。…(中略)…私はおおよそ十二歳になっていた。私は非常に早くめざめた。…(中略)…私は起き上り、振り向いて膝をついたまま外の樹々の葉をじっと見た。この瞬間に私は自我を体験した。すべてが私から離れ、私は突然孤独になったような感じがした。妙な浮かんでいるような感じであった。そして、同時に自分自身に対する不思議な問い、お前はルディ・デリウスか、お前はお前の友達がそう呼んでいるのと同じ人間か、学校で一定の名前を持ち一定の評価を受けるその同じ人間なのか、お前は同一人物なのか。私の中の第二の私が、ここまでまったく客観的に名称としてはたらくこの別の私に向かい合った。それは、今まで無意識的にそれと一体をなして生きてきた私の周囲の世界からのほとんど肉体的な分離のごときものであった。私は突然自分を個体として、取り出されたものとして感じた。私はそのとき、何か永遠に意味深いことが私の内部に起ったのをぼんやり予感した。…(中略)…自我体験は第二の誕生のごときものである。精神的な臍の緒が切れる。我々はもう環境という母胎の中にぼんやりと養われているのではない。血の循環は今や自分自身の中だけで行われなければならない。自立して鼓動する心臓が生まれる。

ルドルフ・フォン・デリウスはこの体験について「今まで無意識的にそれと一体をなして生きてきた私の周囲の世界からのほとんど肉体的な分離のごときものであった」、「自我は自由となり、解放され、漂い…(中略)…世界にとって到達しがたく、破壊しがたいものとなった」と語り、自己と世界との分離と呼ぶべき事態について言

及している。確かにここでは、彼と世界とを分離する「何か」は全く見受けられない。しかし、サルトル、J.P. (Sartre, J.P.) に従えば、ここで彼を世界と分離したのは「何でもないもの (rien)」, すなわち、「無 (néant)」に他ならないのである。そもそも、サルトルに従えば、事物すなわち即自存在 (être-en-soi) は無と何の関係も有さない存在充実 (pleine d'être) であり、自分以外の存在と何の関係も有し得ない⁹⁾。他方、人間の意識すなわち対自存在 (être-pour-soi) は自らの根源的作用である無化作用 (néantisation) によって世界に無をもたらす存在である¹⁰⁾。ルドルフ・フォン・デリウスはここで引用した自我体験の中で、こうした無によって世界と切り離されたゆえに、身体感覚の水準でもいわゆる「地に足のついていない」感じ、すなわち、彼の言う「浮かんでいるような感じ」を覚えたと考えられるのである。

第2節 不登校児童・生徒に見る迫害的世界の出現

ところで、思春期を迎えた青少年の中にはこうした仕方で世界と分離した後、当該世界を今までにない魅力を有する世界として見出す者も見受けられる。西村洲衛男に従えば、こうした体験は自然体験と呼ばれ、自我体験と同時期に見られる青年期特有の経験とされる¹¹⁾。こうした体験の例としては、佐野洋子によって語られた以下の体験を挙げられる¹²⁾。

ボローニヤの街から郊外の山の頂上に向けて、長いかいだんがあった。／とめどなく長いかいだんは、屋根がついていて、両側のかべは修道院の廊下のようにアーチ型にくり抜かれていた。／…(中略)…／私はしゃがみ込んで休んだ。／…(中略)…／どこからかにわとりが一羽でてきて、私の前をよこ切っていった。／そして、涼しい風が吹き抜けていった。／突然わたしは、そのとき諒解した。何と諒解したのかわからない。／そこに木の葉が光っていること、太陽がかがやくこと、土があること、にわとりがいること、そしてここにわたしがいること、一瞬にして私は納得した。／「ああ、そうだったのか」と私は思った。／何がそうだったのかははっきりわからない。ただ、風が吹き抜けたときに、世界がまったく新しい親しきで開けてき、生きることも死ぬことも風と共に、あるいは風のように諒解され、世界が、風と共に、あるいは風のように受け入れてくれたと感じた(下線部は引用者)。

佐野はここで、自分の生きている世界を突如として従来の親しみを喪失し、全く新しい親しみを獲得した世界として見出しているのである。なお、ハイデッガーに従えば、人間は世界-内-存在として世界と慣れ親しみ、

世界のもとに住まっているとき、この世界を理論的に把握するよりも前に、当該世界の中でいかに振る舞うべきかを実践的に心得ている（sich auf etwas verstehen）という意味で諒解（verstehen）しているとされる¹³⁾。当該諒解は、可能的存在（Seinkönnen）すなわち自らの可能性（Möglichkeit）である人間の存在（Sein）自体に他ならない¹⁴⁾。佐野はハイデッガーのこうした見解を知っていたか否かはともかく、「諒解」という言葉をまさにこうした意味で用いていたと考えられるのである。

しかし、思春期を迎えた子どもたちの中には、世界を佐野と同様に今までにない魅力を有する世界としてではなく、むしろ、先に挙げたAさんと同様によそよしい世界又は迫害的な世界として見出す者も見受けられる。確かに、彼らはこうしたとき、自分に対して直接に危害を及ぼす者と出会っているわけではない。しかし、ハイデッガーに従えば、人間は世界の中で生きており、個々の存在者によって自分の存在を脅かされ得ると共に、世界自体によっても自分の存在を脅かされ得る¹⁵⁾。すなわち、人間はこうしたとき、個々の存在者の無意義性を根拠として押しつけがましく迫ってくる世界によって自らの世界—内—存在を脅かされ、不気味さ（Unheimlichkeit）・居心地悪さ（Unzuhausesein）を覚えて不安（Angst）に陥り得るのである¹⁶⁾。

なお、ここで「不安」と訳したドイツ語Angstは「狭い」という意味のドイツ語engと語源を共にし、あたかも胸を締めつけられるかの如き気持ちを指す¹⁷⁾。それゆえ、Aさんの言う「ドキドキしてきて、手に脂汗をかき、今にも自分がどうにかなってしまうのではないか」という気持ちは、まさにハイデッガーの言う不安に他ならない。また、ここで「不気味さ」・「居心地悪さ」と訳したドイツ語Unheimlichkeit及びUnzuhauseseinは、「家」・「家郷」を意味するドイツ語Heim（英語のhomeに相当）及びHaus（英語のhouseに相当）を含み、英語で言うat homeでないこと、すなわち、自分の家の如き親しさを欠いているゆえに安心して得ないことを意味している。ここで挙げたAさんは意識の無化作用によって学校を中心とする世界と切り離され、当該世界を親しみを欠いたよそよしい世界又は迫害的な世界として経験し、当該世界によって自らの世界—内—存在を深刻に脅かされていたのではないだろうか。それゆえ、彼は学校を中心とする世界の中でハイデッガーの言う不気味さ・居心地悪さを覚え、不安へと陥らざるを得なかったのではないだろうか。

第3節 自我体験と世界の二重性

ただし、不登校児童・生徒は、自我体験によって学校を中心とする世界と切り離されても、やがてこの世界と

のつながりを取り戻していくのである。実際に、森田洋司による大規模調査に従えば、中学3年時に不登校であった子どもたちの中で5年後の成人時にあっても就学・就労を果たしておらず、いわゆる社会参加を果たしていない子どもたちは、調査方法上の限界もあるとは言えおおむね四分の一であり、必ずしも多いとは言えないのである¹⁸⁾。また、我々大人も、かつて自我体験によって一度は世界と切り離されたはずであるにもかかわらず、現在では世界とのつながりを取り戻して世界と慣れ親しみ、世界のもとに住まっているのである。しかし、人間は自我体験によって世界と切り離された後、何を根拠として世界とのつながりを回復し得るのであるだろうか。

後の論述を先取りして言えば、この問いは、従来の現象学的研究でも指摘されてきた「世界の二重性」と深くかかわっていると考えられる。本稿ではこのことを、従来の現象学的研究の成果を検討しつつ、文学・精神病理学などの成果を題材として明らかにしていく。

第2章 世界の二重性—万有的世界と地平的世界—

第1節 万有的世界と地平的世界（その1）—世界に関するサルトルの思索を手がかりとして—

木田元に従えば、ハイデッガーによって提唱された世界—内—存在（In-der-Welt-Sein）という概念は、サルトルによってêtre-dans-le-mondeと仏訳されて継承された。しかし、サルトルは、本来は個々の経験の背後にあってこれを可能ならしめる潜在的な地平であるはずの世界を存在者の総体と見なす傾向を有している¹⁹⁾。例えば、サルトルは『存在と無—現象学的存在論の試み—』（*L'être et le néant—essai d'ontologie phénoménologique—*、以下『存在と無』と略記）の中で、対自存在は自らの究極の可能性である「自己との一致」と「或る意味では何でもないものによって、別の意味では世界に存在するものの全体によって引き離されて」いるゆえ、対自存在にとって「自己との一致を企てるときに乗り越える存在」は「世界」に他ならないと語っている²⁰⁾。この言葉を素直に受け取れば、サルトルは「世界に存在するものの全体」と世界とを同一視していると考えざるを得ない。また、木田に従えば、サルトルはハイデッガーであれば「世界へと向けて存在者の全体を超出する」と表現する事象を「世界を超出する」と表現する傾向を有しており、このことはサルトルにとって、世界とは存在者の総体に他ならなかったことを意味しているとされる²¹⁾。

しかし、サルトルはここで、ハイデッガーの世界概念を誤解しているのであろうか。例えば、サルトルは『存在と無』で、「この存在（cet être-ci）」すなわち個別的

な存在は「全存在 (tout l'être) の現前を背景としてのみ『このもの (ceci)』として指名され得る」と述べている²²⁾。しかも、ここで言う「全存在」とは、もともと意識に対して一挙に与えられ、定立される対象ではない。すなわち、ここで言う「全存在」は、松浪信三郎に従えば自らは注意の対象とならないまま、自らの上に「このもの」という形態 (forme) を立ち現れしめる背景 (fond) としての世界であり²³⁾、前原有美子に従えば「個別的な事物が〈このもの〉として意味をもちうる根拠として、非措定的な仕方では対自に与えられている地平」としての世界に他ならない²⁴⁾。それゆえ、サルトルは、『存在と無』にあって既に世界は存在者の総体としての性格と、個々の経験を可能ならしめる潜在的な地平としての性格とを併せもっていることを知っており、同書では単に前者を強調したに過ぎないと考えられる。本稿では世界の有するこうした性格を、世界の万有的性格及び地平的性格と名付ける。

なお、上田閑照は著作『場所—二重世界内存在—』の中で、ここまで論じた「世界の二重性」を的確に表現した作品として、以下に引用する小学4年生の詩を挙げている²⁵⁾。

夕焼け

黒姫山と妙高山の間に日はしずむ／その時みかん色の雲が／すうっとわたしの目の前を通る／一日の出来ごとをのせて雲は動く／わたしが学校で勉強していたのは／見ているだろうか

上田に従えば、ここで「一日の出来ごとをのせて… (中略) …動く」と語られている雲は、「一日の出来事」を含む世界すなわち万有的世界に属していると共に、当該世界を「のせて… (中略) …動く」世界すなわち地平的世界に属している。それゆえ、この雲は万有的世界及び地平的世界という共約不可能な世界を自らの中にとりまとめ、二重性として開示しているのである。このことは上田に従えば決して偶然ではなく、むしろ、人間にとっての世界の有する最も根本的な構造のありのままの開示に他ならないのである²⁶⁾。

第2節 万有的世界と地平的世界 (その2) —世界に関するハイデッガーの思索を手がかりとして—

ところで、ここまで論じた世界の二重性は、ハイデッガーによっては必ずしも明示的に指摘されていない。しかし、上田閑照に従えば、『存在と時間』における前期ハイデッガーの世界概念と、後に四方界 (das Geviert) と名指された後期ハイデッガーの世界概念とは、まさにここまで論じた二重性と呼ぶべき関係を構成している

とされるのである²⁷⁾。

そもそも、ハイデッガーは『存在と時間』の中で、世界の中で出会われる事物的存在者を、或る目的の「ため (um zu)」という性格によって規定される「用在 (Zuhandensein)」すなわち「道具 (Zeug)」として規定した²⁸⁾。しかし、彼は、後に事物的存在者を「天空 (Himmel)」、「大地 (Erde)」、「死すべき者 (der Sterbliche)」すなわち人間及び「神的な者たち (die Götterlichen)」の四者によって構成される四方界を自らの中に取り集める (versammeln) 者、すなわち物 (Ding) として規定する²⁹⁾。すなわち、事物的存在者は或る目的のために役立つ道具であるよりも前に四方界を自らの中に取り集める者であり、このことに基づいて初めて人間にとっての道具となるのである。ハイデッガーの言葉を借りて言えば、例えば橋という事物的存在者は「真の橋」である限り「ひとつの物であり、ただそれだけ (nurdies)」である³⁰⁾。逆に、当該存在者はもし「一つの物でない」とすれば、「『単なる橋』… (中略) …でもない」³¹⁾。上田に従えば、『存在と時間』で記述された事物的存在者を人間にとっての道具たらしめる世界は本稿で言う万有的世界、これを自らの中に四方界を取り集めた物たらしめる世界は本稿で言う地平的世界に当たるのである³²⁾。

ところで、ここまでの論述に従えば、地平的世界は万有的世界を包含すると共に、万有的世界を基礎づける作用を有していると考えられる。例えば、ブランケンブルク、W.に従えば、ドイツ語の日常会話では「そのことはわかりきっている (Die Sache versteht sich)」というフレーズが用いられる³³⁾。このフレーズは、一見するとあたかも事柄 (die Sache) が自ら (sich) を理解している (verstehen) かの如く思われるかもしれない。しかし、このフレーズは、実は英語のitに相当する形式主語esを省略しており³⁴⁾、本来はEs versteht sich die Sacheと書かれなくてはならないのである。しかも、ブランケンブルクに従えば、このesは今日では省略されても差し支えないほど形骸化しているとは言え、本来は「一人の人間の自我へと分極されて来る以前の世界との前志向的な関わり (vorintentionales Weltverhältnis)」を指し、この「関わり」は個々の人間の理解作用へと「分極されて来る」以前の「非人称的で不定詞的」な理解作用を担っている³⁵⁾。すなわち、ここで何ごとかを理解しているのは、根源的には個々の人間でも事柄でもなく、むしろ、これらの根底にあってこれらを包含している無名のesに他ならないのである³⁶⁾。我々はこのesを「一人の人間の自我へと分極されて来る以前」の人間の意識と、この意識によって対象として定立され分節される以前の地平的世界との「前志向的な関わり」と解して

も差し支えないのではないだろうか。ちなみに、ドイツの詩人リルケ、R.M. (Rilke,R.M.) は「秋 (Herbst)」と題する詩で、こうした地平的世界の有する基礎づけ作用を以下のとおりうたっている³⁷⁾。

Herbst (秋)

Die Blätter fallen, fallen wie von weit,/als welkten
in den Himmeln ferne Gärten;/sie fallen mit
verneinender Gebärde

(木の葉がいくつも落ちてゆく／遠いところからきたよう
におちてゆき／天の彼方の遙かな庭々がしおれてしまっ
たかのように／葉は否定する身振りで落ちてゆく)

Und in den Nächten fällt die schwere Erde/aus
allen Sternen in die Einsamkeit.

(そして夜が来れば／重たい大地が落ちている／すべて
の星々から孤独のなかへと)

Wir alle fallen.Diese Hand da fällt./und sieh dir
andre an:es ist in allen.

(われわれはみな落ちる／この手も落ちる／そしてほか
のものたちを見るがいい／落ちることは すべてのもの
のうちにあるのだ)

Und doch ist Einer,welcher dieses Fallen unendlich
sanft in seinen Händen hält.

(それでも ひとりの者がいて この落ちていくのを／
かぎりなくやさしく／両手の中に受けとめている)

リルケはこの詩の第1連～第3連で、万有的世界の全面的な没落をうたっている。しかし、彼は第4連で、万有は自らを支えるべき大地さえ没落してしまった後でも、なおも万有的世界の外にある無名の存在、すなわち、「ひとりの者 (Einer)」によって「受けとめられる」とうたっている。我々はここでリルケの言う「ひとりの者」を、ブランケンブルクの言うEsと同様に万有的世界の外なる地平的世界に属し、しかも、万有的世界を基礎づける非人称的で不定詞的な無名の作用と見なしても差し支えないのではないだろうか。

第3章 地平的世界との切り離し—統合失調症に関する現象学的研究を手がかりとして—

以上の考察に基づけば、暫定的に以下のとおり言えるのではないだろうか。すなわち、不登校児童・生徒は、確かに自我体験を契機として今まで慣れ親しんできた世界と切り離されてしまっている。しかし、彼らはあくまでも万有的世界と切り離されてしまっているだけで、万有的世界を根拠づける地平的世界と切り離されてしまっているのではない。それゆえ、彼らは多くの場合、地平

的世界とのつながりを根拠として万有的世界との親しみを再建し、この世界のもとに住まえるようになっていくのである。

以上のことは意外に思われるかもしれないが、不登校と統合失調症との比較を通じても傍証され得る。そもそも、不登校は統合失調症と違って狭義の疾患ではないにもかかわらず、時として統合失調症と類似した症状を呈すると言われている³⁸⁾。実際に、Aさんの体験は、統合失調症患者に見られる世界没落体験と似ていなくもない。しかし、不登校は既に森田の研究を引用して述べたとおり、健康な子どもたちにも生じる思春期の一過性の問題という性格を有している。他方、統合失調症は決して不治ではないとは言え、不登校よりも深い病理性・持続性を有している。このことは、統合失調症も不登校と同様に万有的世界と切り離されることを本態として含んでいること、しかし、統合失調症患者は不登校児童・生徒と違って地平的世界とも切り離されてしまっているゆえ、万有的世界とのつながりを容易に回復し得なくなっていることに由来していると考えられる。例えば、小出浩之は著作の中で、「広本 (仮名)」という名であることを根拠として広島こそ自分の根拠地であると主張してやまなかった統合失調症患者について以下のとおり述べている³⁹⁾。

彼は自分の置かれた状況を掴もうとするが、それは具体的な他者からではなく… (中略) …字面の類似による相関などからであり、現実の生きた脈絡を失っている。彼が掴もうとして掴みきれず、その前で困惑しているのは… (中略) …個々の事柄ではなく、それら個々の事柄を事柄として成り立たせている基盤である (下線は引用者)。

また、ブランケンブルクは著作の中で、カールハインツ・Zという統合失調症患者の語った以下の言葉を挙げている⁴⁰⁾。

あなたのこの… (中略) …気楽な気持は誰のおかげなのでしょう。生まれや育ちのおかげですか。… (中略) …家族のおかげなのですか。とんでもありません。あなたの安心感とか気楽さとか幸せとかいったものは、本当はあなたがほとんど気づいていない「何か」のおかげなのです。この「何か」があってはじめて、気楽な気持ちとかなんとかがもてるのです。これこそ大前提なのです。この正体のわからない「何か」は、意識化に対して頑固なまでに身を守り、執拗に抵抗するように思われます (後略) … (下線は引用者)。

ここで語られているのは、日常生活の営まれる場である万有的世界で個々の事柄を事柄として成り立たせ、人間の平穏な実存を可能ならしめる暗黙の基盤である。しかも、この基盤はカールハインツによって語られているとおり「意識化に対して頑固なまでに身を守り、執拗に抵抗する」。こうした基盤は、ここまでの論述に基づいて言えば、まさに地平的世界との前志向的なつながりを指していると言って差し支えない。統合失調症患者は不登校児童・生徒とは違って万有的世界とのつながりのみならず、地平的世界とのこうしたつながりも失っている。それゆえ、統合失調症は時として不登校と類似した外見を呈するにもかかわらず、不登校よりも深い病理性と持続性を有していると考えられるのである。

第4章 おわりに—世界の二重性と世界遊戯—

ここまでの考察によって、以下のとおり言えるのではないだろうか。すなわち、人間は一口に世界内存在と言っても、常に万有的世界と地平的世界との双方にかかわっており、リルケの言葉を借りて言えば「二重の国 (Doppelbereich)」に行き渡っている⁴¹⁾。このうち、前者は日常生活の営まれる喧噪の世界・地上の世界・光の世界・生者の世界であり、後者は差し当たってたいい意識の対象とならない沈黙の世界・地下の世界・闇の世界・死者の世界である。しかし、後者は前者を基礎づける世界であると共に、前者に対して「豊穡を贈る」世界に他ならないのである⁴²⁾。リルケはこのことを、「オルフェウスに捧げるソネット (die Sonette an Orpheus)」で以下のとおりうたっている⁴³⁾。

Selbst wenn sich der Bauer sorgt und handelt,
wo die Saat in Sommer sich verwandelt,
reicht er niemals hin. Die Erde schenkt.

(農夫が気づかひながら働いているときでさえ／まかれた種が 夏に姿をかえるところまでは／彼はけっしてとどかない／大地が贈るのだ)

ここで言う「大地」は「まかれた種」が「姿を変える」場所であり、「農夫」すなわち人間にとっては目に見えず、自らの「気づかひ」の「届かない」地下の世界である。しかし、「まかれた種」の「姿を変え」て豊穡を贈るのは、まさにこうした世界に他ならないのである。ただし、人間は往々にしてこのことを忘却し、「生の狭い柵内であって生にとらわれ」、自らの存在の根源を忘却したまま、喧噪の世界で些末事に忙殺され、自分を見失って暮らしている⁴⁴⁾。人間はこうした在り方を脱却するため、万有的世界と地平的世界との間を往復する「遊び

(Spiel)」すなわち、「世界から世界を超えた開けへの出入り」であると共に「世界を超えた開けから世界への出入り」でもある「世界遊戯 (Weltspiel)」を遂行しなくてはならない⁴⁵⁾。例えば、筆者は以前に発表した論文で、非行は遵法的世界とアウトロー的世界との間を行き来する「遊び」であること、また、非行少年は必ずしも職業的犯罪者になるわけではなく、むしろ、非行を通じて「愛することと働くこと (Lieben und Arbeiten)」を学び、健全な大人への成長を果たしていくことを論じてきた⁴⁶⁾。このことは、非行は或る意味で根源的な「世界遊戯」の模倣であり、それゆえ、人間本来の存在を回復する契機となり得ることを示しているのではないだろうか。実際に、上田閑照は『場所』の中で、箱庭療法は「砂箱—砂箱の置かれている部屋」という「施設された二重世界内存在を遊びつつ、元来の二重世界内存在を学ぶ」という含意を有しているゆえに治癒力を有すると論じている⁴⁷⁾。今後の研究では、以上の論述によって明らかにされた世界の二重性と「世界遊戯」を手がかりとして、非行・不登校など思春期問題の本質について考察していきたい。

注

- 1) 石川憲彦・内田良子・山下英三郎編、1993、『子どもたちが語る登校拒否—402人のメッセージ』、世織書房、pp.708~709。
- 2) 世界—内—存在 (In-der-Welt-Sein) は、『存在と時間 (Sein und Zeit)』で用いられているハイデッガーの術語である。ハイデッガーに従えば、ここで「内」と訳されているinは住む・居住する・滞在することを意味するinnan-に由来し、後に述べるとおりに世界と親しみ (mit der Welt vertraut sein)、世界のもとに住まっている (bei der Welt wohnen) ことを意味している (Vgl. Heidegger, M., 1986, *Sein und Zeit*, Max Niemeyer Verlag (以下SZと略記), S.54)。なお、innan-は現代英語でもinおよびinn (宿) として残っている。おって、本稿ではハイデッガー又はサルトルの著書の文言を引用する際、同書の随所に登場する語句及び既に哲学研究の分野では常識となっていると考えられる語句については、簡潔のため引用指示を略し、ドイツ語又はフランス語の原語を付すにとどめる。
- 3) 小出浩之、1978、「分裂病からみた思春期」in中井久夫・山中康裕編『思春期の精神病理と治療』、岩崎学術出版社、pp.73。
- 4) 同上。
- 5) 同上、pp.73~74。
- 6) 注2) 参照。

- 7) 渡辺恒夫・高石恭子編, 2004, 『〈私〉という謎—自我体験の心理学—』, 新曜社, p.8参照。
- 8) ビューラー, Ch. (原田茂訳), 1969, 『青年の精神生活』, 協同出版, pp.92~93。
- 9) Cf.Sartre,J.P. 1973 *L'être et le néant—essai d'ontologie phénoménologique—* Edition Gallimard (以下ENと略記), p.59。
- 10) Cf.EN,pp.58ff。
- 11) 西村, 前掲論文, p.280以下参照。
- 12) 佐野洋子, 1982, 『私の猫たち許してほしい』, 株式会社リポポート, pp.22~24。
- 13) Vgl.SZ,S.144f。
- 14) Vgl.ebd。
- 15) Vgl.SZ,S.186~187。
- 16) Vgl.SZ,S.184f。
- 17) 『存在と時間』の邦訳書の一つ(ハイデッガー, M. (原佑責任編集), 1980, 『世界の名著74』(以下『SZ邦訳』と略記), 中央公論社)でも, sich ängstenを「胸苦しくさせる」と訳している(Vgl.SZ,S.187及びSZ邦訳p.324参照)。
- 18) 森田洋司編著, 2003, 『不登校—その後 不登校経験者が語る心理と行動の軌跡』, 教育開発研究所, pp.23以下参照。
- 19) 木田元, 1991, 『現代の哲学』, 講談社, pp.83~84参照。
- 20) Cf.EN,p.146。
- 21) 木田, 前掲書, pp.84~85参照。
- 22) Cf.EN.p.229。
- 23) サルトル(松浪信三郎訳), 1999, 『存在と無—現象学的存在論の試み—』新装版上巻, p.53参照。なお, ここで言う形態(forme)—背景(fond)は, 松浪に従えばゲシュタルト心理学で言う図—地にはほぼ相当する(同上, p.537参照)。
- 24) 前原有美子, 2000, 「サルトル『存在と無』における世界の二重性」(『東洋大学大学院紀要』36号), p.235参照。
- 25) 上田閑照, 1992, 『場所—二重世界内存在—』, 弘文堂, p.4。
- 26) 同上, p.17参照。
- 27) 同上, pp.40~41参照。
- 28) Vgl.SZ,S.66f。
- 29) Vgl.Heidegger,M.,2000,*Bauen, Wohnen, Denken* (以下BWと略記) in *Vorträge und Aufsätze, Vittorio Klostermann,S.150f.*
- 30) Vgl.BW,S155。
- 31) Vgl.ebd。
- 32) 上田, 前掲書, p.70~73参照。
- 33) ブランケンブルク, W. (木村敏・岡本進・島弘嗣訳), 1978, 『自明性の喪失—分裂病の現象学—』, みすず書房, p.127。
- 34) 現代ドイツ語では, 形式主語esを省略することは特に珍しくない。
- 35) ブランケンブルク, 前掲書, pp.127~128参照。
- 36) 同上参照。
- 37) この詩は, 我が国では『形象詩集』の名で知られる *Das Buch der Bilder*に収められている。本稿では原文についてはRilke, Rainer Maria. *Sämtliche Werke. Hrsg. vom Rilke-Archiv. In Verbindung mit Ruth Sieber-Rilke besorgt von Ernst Zinn. Frankfurt/M. 1987. Bd. I(insel taschenbuch 1101), S.400*を参照し, 邦訳については加藤泰義, 1980, 『リルケとハイデガー』, 芸立出版, pp.145~146を参照した。
- 38) 平井信義, 1978, 『登校拒否児』, 新曜社, pp.138以下参照。
- 39) 小出浩之, 1978, 「分裂病からみた思春期」(中井久夫・山中康裕編, 『思春期の精神病理と治療』, 岩崎学術出版社), p.71。
- 40) ブランケンブルク, 前掲書, p.104。
- 41) Vgl.Rilke,a.a.O.,S.736.訳語については加藤, 前掲書, pp.47以下を参照した。
- 42) 加藤, 前掲書, p.46参照。
- 43) Rilke,a.a.O.,S.738。
- 44) 同上, p.46参照。
- 45) 上田, 前掲書, pp.242以下参照。
- 46) 拙著, 2004, 「非行を卒業するとき—少年にとって『大人になること』の意味—」(東京大学大学院教育学研究科学校教育開発学コース『学ぶと教えるの現象学研究 十』)参照。なお, 「愛することと働くこと(Lieben und Arbeiten)」という言葉は, 「正常な人間がうまくやることができねばならぬ第一のこととは何だと思うか」という問いに対するフロイト(Freud, S.)の答えとされている(エリクソン, E.H.(岩瀬庸理訳), 『アイデンティティー—青年と危機—』, 金沢文庫, p.179参照)。
- 47) 上田, 前掲書, pp.228以下参照。

